



15年ほど前、初めて中国を訪れました。そのころの北京は、空港に降りると暖房用の石炭のにおいが立ち込め、広い道路には、車よりも数限りない自転車が行き来し、その数の多さに驚いたことを覚えています。中国はまだ遅れているなあ、正直そのときは感じました。その後、目覚ましい発展を続け、今や車の販売台数でも日本を追い越しました。最近では毎年、中国を訪れています。中国は、中国のスピードは想像を超えるものがあります。

このような、中国やインドにおいてもモーターリゼーション（車社会化）の波が押し寄せ、より快適な、よりエネルギーを消費する社会が形成されつつあります。日本も同じ

ような道を歩んできたので、人のことをとやかく言える立場にはありません。そのような社会の変化を認めつつも、地球上で増加しているCO₂を削減するために、知恵を出さなければならぬときを迎えていると思います。今度は、日本が車よりも自転車を利用するときかもしれません。CO₂増加による地球温暖化の恐ろしさは言うまでもありません。誰もがCO₂を減らさないと大変なことになるのは知っています。しかし、CO₂削減のためには、わたしたち一人ひとりが減らす努力をすることが必要であるのに、「自分ひとりくらいが努力しても大した効果はない」「自分ひとりくらいがエネルギーを多く使ってもそんなに害は

ない」と考えてしまうという弱点があるのではないのでしょうか。けれども、決してそうではありません。無駄な明かりはつけない、近くへ行く場合は車を使わないなど、わたしたち一人ひとりの努力が積み重なって、地球全体での大きな効果となるのだと思います。そして一方では、CO₂削減のため、国がもっと責任を持つて抜本的な方策を打ち出すべきだと思えます。鳥羽市では、ごみの減量化に取り組むなどCO₂を減らそうとしています。地方の自治体でできることには限界があります。技術面、税制面で今後、国が主体的に動かないと、やはりつきりした効果は出てこないでしょうし、温暖化をストップすることが手遅れになる恐れがあります。「自然は祖先から受け継いだものでなく、子孫から借りているものである」というアメリカ合衆国のナバホインディアンの言葉もあります。自分たちのことはともかく、子や孫の世代のために本当に真剣に考え、そして行動する必要に迫られていると思えます。

3月3日といえ、まず思い浮かべるのは、桃の節句やひなまつりではないでしょうか。そのほかに、3月3日は、1922（大正11）年、被差別部落出身の西光万吉（さいこうまんきち）という青年が、京都市の岡崎公会堂で日本最初の人権宣言である水平社宣言を読み上げて、全国水平社が結成された記念すべき日でもあるのです。それから86年がたとうとしています。多くの人たちの努力にもかかわらず、今なお部落差別は残っています。部落差別は、「もうな

くなつた」、「いつまで言っているんだ」などと言う人がいますが、そうではありません。見えにくくなっているだけです。部落差別は、結婚・就職などの人生の大きな節目に現れるといわれています。2004（平成16）年の「人権に関する三重県民意識調査」の結果を見ると、それがよく分かります。設問で、「こどもの結婚相手と同和地区出身者だった場合は、「考え直すように言う」と答えた人が、まだ約30%もいたのです。しかし、前回調査の1998（平成10）年の約40%と比べると、その割合は減ってきてはいます。特に、20歳代で、「まったく問題にしない」が増え、「考え直すように言う」が減ってきているということは、喜ばしいことです。学校などでの、人権や部落問題学習の成果が少しずつ表れてきているのではないかと思われま

す。いま一度、部落問題にも関心を持っていただき、自分の心の中に潜む差別を取り除けば、部落問題をはじめとするあらゆる人権問題が解決することでしょう。